私たちは、福祉を通じてすべての人が心豊かに暮らすことができる社会形成を目指します！

Rosen（ローゼン）だより

2026年10月号

＜発行元＞
社会福祉法人
千葉県福祉援護会
〒273-0047
千葉県船橋市藤原8-17-2
(ホームページ)
https://engokai.or.jp

「おいはまごちゃまぜ食堂」

（報告：千葉市あんしんケアセンター浜野　仲野　勢津子）

あんしんケアセンター浜野では、圏域の多職種連携会議で地域課題として挙がった「貧困」をテーマに様々な活動を続けてきました。地域に向けた周知活動として「Ｓすげぇ Ｄ大事な Ｇ元気な ｓ食事」や「はまフェス～福祉を知ろう！～」といったイベントを小学校体育館を会場に毎年開催しています。

ただ、本当に困っている方には支援が届いていないのではという疑問がずっと残っていました。そこで、町内自治会や社協地区部会の皆様に「こども食堂」開催の提案をさせていただきました。提案当初は、「そんなもの必要なのか？」「来る人はいるのか？」といった開催に疑問視する声もあがりましたが、小学校教頭先生からの食料支援の依頼やセンターに寄せられる相談内容を説明することで、「とりあえず、やってみよう！」とご協力いただけることになりました。

初回は、令和７年１２月に、生実町会館を会場として４８名の方とカレーを一緒に食べました。令和８年５月の浜野町会館での開催では、準備を簡略化しようと材料が少ないハヤシライスをメニューに選択し４５名の方と食事をしました。そして、令和８年１０月には塩田町会館での開催が決まっています。

「こども食堂をやりたいんです。」の声掛けから、多くの地域の皆様のご理解・ご協力を頂きながら、『おいはまごちゃまぜ食堂』は走り出しました。『おいはまごちゃまぜ食堂』の『おいはま』はこの地域の呼び名です。『ごちゃまぜ』は、こどもだけでなく、老若男女かかわらずに多くの方に参加してもらえるように命名しました。今はまだ試験的開催で、令和９年までの２年間で最低６カ所での開催を目指しています。開催毎に会場が違うのは、その地域の皆様にも主体的に関わってもらい、継続の必要性があるかどうかも考えていただくためです。高齢者の相談窓口であるあんしんケアセンターが、こども食堂!?と疑問視された活動ですが、高齢者にも孤食や社会的孤立といった問題があり、『おいはまごちゃまぜ食堂』を通して高齢者の居場所づくりにも発展させたいと考えました。この活動をきっかけに、地域連携を更に推進していきたいと考えています。開催にあたり、補助金交付してくださった生浜地区地域運営委員会、後援頂いている浜野長嶋内科、ボランティアの皆様に深く感謝申し上げます。

（報告：障害者支援施設ローゼンヴィラ藤原　宮﨑　裕輔）

「ご入居者・ご利用者の意思を尊重した支援」

私たちは、兼ねてからご入居者・ご利用者の意思を尊重した支援を意識して取り組んでまいりました。そんな私たちの取り組みを報告したいと思います。

各施設・事業所（誠光園・ローゼンヴィラ藤原・オーヴェル・アトリエプレジュ）では、研修等を通じて日頃の関わり方などの質を高められるよう努めてきました。加えて、2008 年（H20）に記録システムを導入し、ご入居者・ご利用者の活動や支援時の様子など日々の記録をデータで残してきました。そうして蓄積された情報により、ご入居者の生活の状況を時系列で把握できるようになり、職員間で共有する事が容易となりました。また、記録の中にはご入居者の思いや考えが含まれている事も多く、記録を活用してそういった思いや考えに寄り添った支援に繋げる方法を模索してきました。

その様な中、令和６年の報酬改定において、ご利用者の自己決定の尊重と意思決定に配慮する旨が示され、これを機に今まで私たちが取り組んできた事について再度考える事としました。各施設・事業所からサービス管理責任者等が集まり、①意思決定支援のプロセスの確立（手引きの作成）、②個別支援会議の在り方についての検討、③個別支援計画の見直しと大きく３つの項目で検討を行いました。

①については、“障害の有無に関わらず意思はある”事を前提に可能な限りご本人自らが意思決定できるよう、障害福祉サービス等の提供に係る意思決定支援ガイドラインを参考にどの様に関わっていくのかを手引きとしてまとめ、体制を整えました。

②については、①の“本人の事を本人抜きに考えない”実践の一環として、入院などよほどの事が無い限り、ご入居者・ご利用者には個別支援会議に参加していただきます。会議では健康面や日常生活、余暇活動、地域移行などの各計画についてご本人のペースに合わせながら一緒に話し合っています。

③については、個別支援計画を構成する書類の一部を見直し、ご本人の考えや思いを把握・共有するため、職員が記録システムに記録した支援や活動時の様子、反応、仕草などからサービス管理責任者が必要な情報を抽出し、一定の様式に集約します。内容はその方の支援に関わるすべての職員が閲覧できるようにし、支援に活かせるように見直しました。

今後も、ご入居者・ご利用者一人一人に改めて向き合い、言葉がうまく話せない方でも、その方の思いや考えを、時にはご家族や関係者の皆様にもご協力いただき、支援に関わる職員全員で共有して“寄り添った支援”が行えるように取り組んでいきたいと思います。

※個別支援会議時の様子

（報告：特別養護老人ホームローゼンヴィラ藤原　太田　寛士）

【法人研修を活かした、より働きやすい職場づくり】

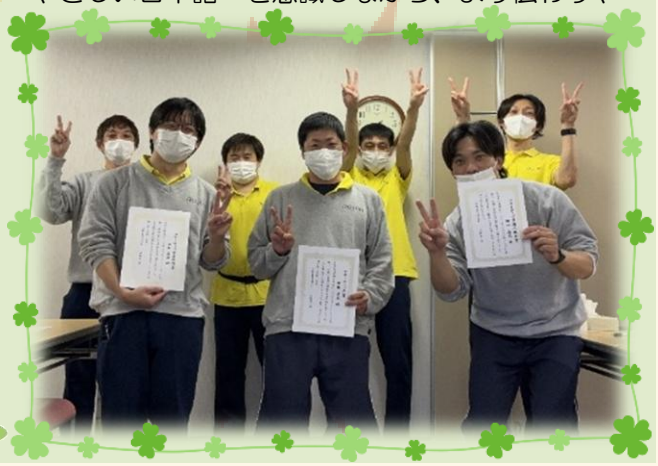
特別養護老人ホームローゼンヴィラ藤原弐番館では、令和７年度から継続して、「より働きやすい職場に」をテーマに、良好な人間関係の構築を目的とした取り組みを進めてきました。

働きやすい職場づくりにおいては、“人間関係が良好であること”が重要な要素の一つです。外国人職員・日本人職員ともに良好な関係を継続していくため、コミュニケーション力の向上を図り、法人全体で実施しているアサーティブコミュニケーション研修を、弐番館でも毎月の役職者ミーティングに組み込み、継続的に実施しました。

アサーティブコミュニケーションとは、相手を尊重しながら、自分の意見や感情を率直かつ誠実に伝える「自他尊重」の対話手法で、Win-Win の関係を築くためのスキルです。研修では、まずアサーティブの基本を学び、自分の性格やコミュニケーション傾向を理解したうえで、事例を用いた実践的な演習を行いました。

その後、役職者が現場で実践した事例を共有し、より良い伝え方や関わり方を検討する場を継続的に設けました。また、最もアサーティブコミュニケーションを実践できていた役職者を表彰し、取り組みを前向きに続けられる工夫も行いました。

介護の現場では、外国人職員が増えていることもあり、言葉の壁を感じる場面も少なくありません。今回の研修で身につけたスキルを生かし、外国人職員と接するときには、より“やさしい日本語”を意識しながら、より伝わりやすいコミュニケーションを心がけています。



職員一人ひとりが安心して働き続けられる環境づくりは、ご入居者やご家族との関係づくりにもつながる大切な基盤です。

これからも、より良い人間関係を継続していく為の取り組みを続け、誰もが笑顔で働ける魅力ある職場を目指していきたいと思っております。

令和７年度分　苦情解決状況の公表（第三者委員の介入があった苦情の実績）

	（事業所名）	（内容・種別）	（発生日）	（解決日）
①	※令和７年度は、第三者委員が介入した苦情はございません。			

令和７・８年度　ご寄付・ご祝儀一覧

令和７年 10 月７日～令和８年７月６日に法人各施設にご寄付及びご祝儀をいただきました皆様です。ありがとうございました。
※事前にご承諾いただきました方のお名前を掲載させていただいております。そのほか６名様にご寄付いただいております。
ご寄付いただきました全ての皆様に御礼申し上げます。

ご寄付	ご祝儀	ご寄贈	協賛品ご提供	
松本　勇治　様	㈱レイズウェイ　様	石川　登志雄　様	ー	
石川　育代　様	富士見下町内会　様	西ノ原　一恵　様		
望月　昌子　様	みつる会　様	成川　典徳　様		（順不同）
芝倉　久子　様	豊島　勇　様			
佐久間　隆　様	小篭　忠雄　様			

（報告：ローゼンそが保育園　鈴木　ちさと）

「みんなで楽しんだ夏祭り」

７月 18 日(土)、当園の恒例行事である「夏祭り」を開催いたしました。毎年、職員が知恵を出し合い、園児とご家族の皆様が一緒に楽しめる内容を企画しています。今年は、魚釣りやねらってポン、大型パズル、にょきにょきアイス(制作)、フォトコーナー、盆踊りなど、多彩なコーナーを用意し、会場は終始賑やかな笑顔に包まれました。

なかでも夏祭りの目玉は、年長組の子どもたちが一つのコーナーを任され、お祭りをイメージしたお店を開店することです。子どもたちは２か月ほど前から相談を始め、「どんなお店をやりたいか」意見を出し合いました。その後も「商品はどんな素材でいくつ作ればよいか」「小さい子たちが扱っても危なくないか」など、何度も話し合いや確認を重ねて当日に向けて準備を進めてきました。今年の年長組のお店は「クレープ屋さん」でした。当日はたくさんのお客さんが来店し、子どもたちはとても張り切って嬉しそうにお店屋さんとしてのやり取りを楽しんでいました。同じ目的に向かって友達と協力し、たくさんのお客さんに喜んでもらえた経験は、子どもたちの大きな自信に繋がったようです。

また、当園の夏祭りでは、様々な方にボランティアとしてご参加いただくのも恒例となっています。今年も準備段階では保護者の皆様が、各コーナーの物品や会場の装飾制作をお手伝いしてくださいました。さらに当日は、保育士養成校の学生や卒園児も各コーナーのお手伝いに駆けつけ、祭りを盛り上げてくれました。保育士を志す学生にとっては、園行事を体験し、子どもや保護者の方と直接触れ合うことで保育の楽しさを味わう良い機会となったようです。卒園児たちは、かつて使用していた椅子や棚の小ささに驚き、懐かしい園の雰囲気を楽しみながら自身の成長を感じているようでした。

夏祭りという行事を通して、様々な世代や地域の方にご参加いただき、共に楽しい夏のひと時を過ごすことができました。